

1 学校教育目標

<教育理念>

地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり ～飛翔～

<教育方針>

6年間の計画的・継続的な教育活動を通して、生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成を図る。

<6つの特色ある教育活動「飛翔プロジェクト」>

- 1 大学・地域連携＝コミュニティ・スクール導入による大学や地域との連携
- 2 人間教育＝生徒会活動・部活動等による豊かな人間性と主体性の育成
- 3 学力育成＝6年一貫の効果的な教育課程による学力育成と進路実現
- 4 国際教育＝国際交流と語学教育の充実によるグローバル人材の育成
- 5 サイエンス教育＝理数教育や講演会等の充実による理系人材の育成
- 6 総合「海峡学」＝キャリア教育と探究活動による主体的学習者の育成

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)

(1) 確かな学力の保証

→ 各学年・教科で学力面のデータ分析を行い、全教員で共通理解を図り、授業改善などに取り組んだ結果、今年度も如実な学力向上がみられた。今後とも一層学力向上に取り組む。

- 次期学習指導要領に基づき新大学入試制度に対応した教育課程の実施に取り組む。
 - ・次期学習指導要領に対応した新教育課程の研究に全教科で取り組み、編成を終えた。
 - さらに、新大学入試制度についても研究を深め、より効果的な教育課程の実施に努めたい。

- 授業以外での学習時間の目標を示すことで生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。
 - ・授業以外の学習時間については、生徒・保護者の約半数、教員の7割が不足していると感じている。今後の大きな課題である。

- 世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実を図る。
 - ・本校主催の英語学習セミナーに加え、民間業者による同セミナーの新規実施など、授業以外での英語教育にも積極的に取り組んだ。
 - ・ALTと理数教科教員でイメージ教育を実施し、本校全体で研修に取り組んだ。今後も研修を進めていきたい。
 - ・平成29年度入学生から、4年生時での14日間カナダ語学研修に変更し、より効果的な英語教育を計画している。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

→ 一人ひとりに対応した適切な指導により、就職希望者7名は公務員6名を含め希望実現、進学希望者95名は88人が希望を実現した。

- 生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学等ゼミ訪問や企業研究等の取組を一層推進していく。
 - ・1年生で下関市立大学訪問、2年生で山口東京理科大学訪問、3年生で山口大学本学訪問、4年生で志望大学オープンキャンパス参加、3～5年生では県内国公立大学講師による「大学出前講義」を実施し、生徒の明確な進路意識を醸成することができた。

- 各学年で模擬試験結果などの進路データを有効に活用した進路検討会を実施する。
 - ・各学年の進路検討会で模擬試験結果などを分析し、適切な対応をした結果、模試成績の向上につながった。

- 本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。
 - ・小論文対策・面接対策に組織的に取り組み、成果をあげた。
 - ・作成された面接・集団討論の生徒用マニュアルが指導に生かされた。

(3) 豊かな心をもち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

→ 各分掌・学年で人間教育に取り組み、着実に成果をあげている。

- 生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。
 - ・各種行事において、リトル・ティーチャー制を取り入れ、生徒の企画・運営・指導力を発揮させ、生徒の自主活動を推進させることができた。
 - ・寮生活においてもリトル・ティーチャー制を取り入れることで、自立心が育ち、円滑な生活を送ることができた。

- 人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。
 - ・学校行事や学年行事で、生徒が主体的に活動する場を多く設定し、望ましい集団の育成に努めた。

- 生徒が主体的に取り組むボランティア活動を一層推進する。
 - ・ペットボトルキャップ・プルタブなどの収集ボランティア、歳末たすけあい募金活動などに多くの生徒が参加した。
 - 今後も多くの生徒が参加できるよう、一層の充実を図っていく。

- 留学制度について啓発活動の充実を図り、生徒の参加を促進する。
 - ・海外留学について啓発活動に取り組み、留学を促進した結果、「トビタテ！留学JAPAN」への参加など、留学する生徒が増加した。

(4) 組織としての課題解決力の確立

→ 全教員がリスクマネジメント意識を持てるように今後とも計画的に研修に取り組んでいく。

- 教科研究会、互見授業と教科領域別研究授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。
 - ・各教科で定期的・計画的に研究会を開催し、教科指導力向上に励んだ。
 - ・イメージ教育活動を実施し、教員全体で研修に取り組んだ。

- 生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。
 - ・計画的に研修を実施した。引き続き教員の指導力の一層の向上を図っていく。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

→ 志願倍率が1.8倍と最も高くなり、強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。

- 本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実を図る。
 - ・「飛翔プロジェクト」を推進し、地域・保護者への広報活動の充実することにより、本校の教育活動の理解が深まった。

- 小学生を対象とした、おいのやまサイエンスセミナー、英会話教室、部活動体験などの取組の充実を図る。
 - ・本校での教育活動体験により本校への関心・興味が一層強まり、強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。

3 本年度重点目標

本年度は、飛翔プロジェクトを円滑に運営することで、地域や大学との連携を一層深めながら「未来社会を生き抜く総合的な人間力」と「高い学力」を培い、世界に飛躍する人材の育成に向けて教育活動の充実に努める。

(1) 確かな学力の保証

- 新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践する。
- 生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。
- 世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実に努める。
- ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

- 生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。
- 本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。

(3) 豊かな心を持ち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

- 生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。
- 人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。
- 留学制度について啓発活動の充実に努め、生徒の参加を促進する。

(4) 組織としての課題解決力の確立

- 教科研修会と互見業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。
- 生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

- 本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実に努める。
- 小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実に努める。

4 自己評価

5 学校関係者評価

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
教務	学力の向上	各科目の特徴や大学の入試科目を理解してもらい、将来を見据えた科目選択につなげていく。	4 新たな教育課程の下で学ぶ現4回生・5回生について、外部模試（1月）の平均点偏差値（全国）を上位学年よりも2ポイント以上向上させた。	3	○現4回生では、上位学年に比べて平均点偏差値（全国）が0.8ポイント上昇した。現5回生では、3.3ポイント上昇した。特に、5回生での上位層の増加が顕著であった。今後も学力の3要素を総合的に高める授業づくりについて、教科研修会等で検討を重ねていきたい。	外部模試の偏差値の伸びはこれまでの取り組みとして評価できる。偏差値のみにとらわれず、今後とも学力の3要素を総合的に高める更なる取組を推進していただきたい。	A
			3 新たな教育課程の下で学ぶ現4回生・5回生について、外部模試（1月）の平均点偏差値（全国）を上位学年よりも1ポイント以上向上させた。				
			2 新たな教育課程の下で学ぶ現4回生・5回生について、外部模試（1月）の平均点偏差値（全国）を上位学年よりも0.5ポイント程度向上させた。				
			1 現4回生・5回生の外部模試（1月）において、平均点偏差値（全国）を上位学年よりも向上させることができなかった。				
生徒・保護者に向けた科目選択指導・説明の充実	各科目の特徴や大学の入試科目を理解してもらい、将来を見据えた科目選択につなげていく。	4 生徒・保護者に向けた科目選択に関する指導や説明会を、2回生から5回生の4学年で合計8回以上行った。	4	○科目選択に関する説明会を延べ8回行った。特に、文理選択を初めて経験する3回生に対して、重点的に指導を行ったという視点のみで科目選択を行うのではなく、幅広い視点から自らの進路について考えさせ、主体的な進路選択・科目選択ができるよう支援していきたい。	科目選択は生徒の進路を大きく左右するものである。自らが考えて進路選択できるように、3回生での文理選択の指導、入試科目を見据えたきめ細やかな説明を引き続きお願いしたい。また、選択後も選択しなかった側の分野に対する興味を継続させる工夫は続けていただきたい。	A	
		3 生徒・保護者に向けた科目選択に関する指導や説明会を、2回生から5回生の4学年で合計6回以上行った。					
		2 生徒・保護者に向けた科目選択に関する指導や説明会を、2回生から5回生の4学年で合計4回以上行った。					
		1 科目選択に関する指導や説明会を、ほとんど行えなかった。					
家庭学習習慣の定着・向上	朝学や授業の予習・復習の取組を強化し、生徒の家庭学習習慣の定着・向上を図る。	4 学校評価アンケートで、「十分な家庭学習をしている」と回答した生徒の割合が、前年度に比べ大きく上昇した。	4	○昨年度の学校評価アンケートでは肯定的回答が50%だったが、今年度は64%へと大幅に増加した。家庭学習の目標時間の共有を図ったことや、端末導入により学習環境が充実したことなどが要因と考えられる。今後、ICTの利点を生かして、授業と家庭学習の好循環を生み出すことができるよう方策を考えたい。	端末導入により、学習環境が充実し、家庭学習の取組が定着・向上してきたことは望ましい傾向であるが、学習習慣の評価指標を時間のみでなく、充実度（質）も基準に入れてはどうか。端末の節度ある利用を意識させながら、さらにこれを伸ばすように指導をお願いしたい。	B	
		3 学校評価アンケートで、「十分な家庭学習をしている」と回答した生徒の割合が、前年度に比べやや上昇した。					
		2 学校評価アンケートで、「十分な家庭学習をしている」と回答した生徒の割合が、前年度と同程度であった。					
		1 学校評価アンケートで、「十分な家庭学習をしている」と回答した生徒の割合が、前年度よりも大きく減少した。					
英語教育の改善・充実	小中高連携英語教育推進校としての役割を果たしながら、教材や指導方法、目標設定などについて見直しを図る。	4 推進校（小中学校）における公開授業・研究協議への参加を受けて、本校英語教育の具体的改善策を生み出すことができた。	4	○他校の公開授業や研究協議に積極的に参加し、新学習指導要領の下での各学校の取組について理解を深めた。教科研修会では、場面を意識した言語活動の充実に努めること、年間指導計画およびCan-Doリストにパフォーマンステストを明確に位置付けることなど、次年度に向けた改善策を生み出すことができた。	小中高連携英語教育推進校として、積極的に他校の取組に参加し、教科内での充実した研修がうかがわれる。語学学習は継続性が大切であり、次年度は小中高連携の成果を生かして欲しい。	A	
		3 推進校（小中学校）における公開授業・研究協議への参加を受けて、本校英語教育の改善策について教科内で検討することができた。					
		2 推進校（小中学校）における公開授業・研究協議へ参加したが、本校英語教育の課題について教科内で共有するのみにとどまった。					
		1 推進校（小中学校）での公開授業、研究協議に参加したものの、本校英語教育の課題について教科内で共有することができなかった。					

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価	
生徒指導	生徒会活動・学校行事におけるリトル・ティーチャー制の推進	生徒会活動、学校行事等で、リトル・ティーチャー制を取り入れ、上級生から下級生への仕事の指導や計画的な引き継ぎにより、学校行事や生徒会活動などを活性化させる。	4 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が80%以上である。	4	○94%の生徒が、学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれた。あるいは教えたという認識がある。かつ、94%の生徒が、幅広い年齢層の生徒がいることは自分にとってプラスだと思っている。本校の最大の特徴である6学年の生徒が在籍する強みが十分に生かされている。	リトル・ティーチャー制は幅広い年齢層の生徒が共存している中等教育学校の大きな利点であり強みである。生徒同士が学年を超えてコミュニケーションを図り、今後とも推進していただき、温かい人間関係を築く力を育てていきたい。	A	
			3 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が60%未満である。					
	ボランティア活動の活性化	校外や校内でのボランティア活動など、地域に目を向けた活動を計画・実施する。	4 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が80%以上である。	3	○新型コロナウイルスの影響で、学校外の活動としてのボランティア活動はほぼ中止となったが、78%の生徒が、本校はボランティア活動が盛んだと感じており、歳末助け合い運動など、積極的に活動している。また、発展途上国への物資支援を生徒が発案し、実施するなど、生徒が主体的にボランティア活動を行っている。	生徒のボランティア活動への参加意欲は高いと思われる。コロナ禍において活動の工夫などによって機会を増やし、自主性・積極性を高めていただきたい。	A	
			3 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が60%未満である。					
	挨拶を含む生徒のマナー・規範意識の向上	交通安全指導、あいさつ運動を通して、ルールからマナー・エチケットへと意識改革を図るとともに、情報モラルや薬物乱用防止の講演会を計画・実施する。	4 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が80%以上である。	4	○98%の生徒が、本校の「生活の心得」や身だしなみについてを含めたマナーを守って学校生活を送っているとの認識がある。生徒会役員が集会で身だしなみについての声掛けやマナーアップ週間にて意識を高めている。ただ、30%の生徒は「どちらかといえばいい」を選択している現状があるため、自分で考え判断し、行動するという姿勢を今後も高めていきたい。	生徒は規範意識を高くもち、落ち着いた学校生活を送っている。規則で縛りすぎず、常識感覚を身に付けさせ、それを基に行動するように生徒の意識が高まるとよい。	A	
			3 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が60%未満である。					
いじめ・問題行動等に迅速に対応する組織的な生徒指導体制の確立	積極的な生徒指導を推進し、かついじめ・問題行動等に迅速に対応するために、学年間、教員間の情報共有と、組織的な対応を実施する。	4 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、迅速かつ組織的に対応することができた。	4	○生徒の抱える不安や悩みおよび人間関係のトラブルなど、課題解決のため教員同士が月1回の情報交換を行った。また、速やかな情報共有が教職員間で徹底できているため、緊急性の高い課題については、随時緊急対応を行うなど、チーム対応することができた。今後も研修などを通して、背景には「いじめ」があるのではないかと疑い、認知力の感度を高めていきたい。	問題行動等に対し、生徒の心情を理解しながら組織として迅速に対応していただいている。日常的に生徒観察を行い、情報を共有して組織的な対応を引き続き保っていただきたい。	A		
		3 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、組織的に対応することができた。						
		2 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、対応することができた。						
		1 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、対応することができなかった。						
進路指導課	キャリア指導	総合的な学習「海峽学」による明確な進路意識を醸成するキャリア教育の推進	4 80%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。	4	○92%の生徒がキャリア意識が向上したとらえている。「ようこそ先輩」「3-6トーク」は実施できなかったが、上級生が下級生に講演する「キャリア講演会」を2回実施することができた。3回生も参加する予定であった「出前講義」は4・5回生のみで実施し、キャリア意識の向上や進路選択に生かすことができた。	コロナ禍のため、予定通りには実施できなかったのは残念であるが、各学年のキャリア教育の取組が生徒の進路意識の高揚に結び付いている。卒業段階の生徒を対象にこの取組の効果を検証できれば、内容の発展や改善などにもつながるであろう。	A	
			3 60%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。					
			2 40%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。					
			1 生徒のキャリア意識の向上は十分に認められなかった。					
	進学指導	進学実績の向上	模試の成績状況の継続的提供と各回生での進路検討会（模試分析会）を実施する。	4 模試成績資料を複数回提供し、各回生で進路検討会を複数回実施できた。	4	○成績資料を模試ごとに提供し、学力向上に向けて、各回生で進路検討会を複数回実施した。同時に、進路検討会で選出した成績上位者を中心に、超難関大プログラムの一環として駿台やZ会のハイレベル模試の受験を勧めた。	低学年段階からこまめに各学年へ成績資料を提供し、希望者模試についてもより積極的な受験指導を引き続き行っていただきたい。併せて生徒が自分の将来を考える事の重要性もご指導いただきたい。	A
				3 模試成績資料を複数回提供し、各回生で進路検討会を年1回実施できた。				
				2 模試成績資料を複数回提供することができた。				
				1 模試成績資料を複数回提供するに至らず、各回生での進路検討会も実施できなかった。				
	新大学入試への対策の充実	新大学入試に関する必要な情報を提供し、ポートフォリオのシステムの導入と周知徹底を図る。	4 入試情報を複数回提供し、ポートフォリオのシステムの導入と周知徹底を図ることができた。	3	○新大学入試に関する入試情報を「進路だより」を活用して提供したが、年度後半の受験期には発行することができなかった。ポートフォリオに関する情報は、キャリアパスポートの活用と併せて周知徹底することができた。	新大学入試システムの動向を踏まえ、正しい情報を迅速に提供する事が大切である。ポートフォリオのシステムの改善・充実を図り、生徒が積極的に活用する指導をお願いしたい。	A	
			3 入試情報を複数回提供したが、ポートフォリオのシステムの導入と周知徹底を図ることはできなかった。					
			2 入試情報を1回提供したが、ポートフォリオのシステムの導入と周知徹底を図ることはできなかった。					
			1 入試情報を一度も提供できず、ポートフォリオのシステムの導入と周知徹底を図ることもできなかった。					
保健体育課	体力の向上と心身共にたくましい人間力の育成	体育的行事や日々の生活の中で、主体的・積極的に活動し、良好な対人関係を築く力を高め、体力及びたくましい人間力の向上を図る。	4 体力及び人間力の向上に積極的に取り組み、80%以上の生徒が成果をあげたと感じる事ができた。	4	○新型コロナ感染対策のため、体育大会の規模を縮小し代替として「隊別対抗2020」を開催したが、事後アンケートでは、90%以上の生徒が、体力または人間力が向上したと答えていた。	コロナ禍において、体育大会が例年通りに開催できなかったのは残念であった。代替えの企画を生徒が企画し実施できたことは、生徒の人間力の向上につながったと思える。引き続き生徒の主体的な活動を推進してもらいたい。	A	
			3 体力及び人間力の向上に積極的に取り組み、半数以上の生徒が成果をあげたと感じる事ができた。					
			2 体力及び人間力の向上に積極的に取り組み、成果をあげたと感じる事ができた生徒が半数以下であった。					
			1 ほとんどの生徒が、体力及び人間力の向上に積極的に取り組むことができず、成果があげられなかった。					
	清掃・環境美化意識の向上と実践力の育成	見つけ掃除を中心とした清掃活動・校内美化活動の取組や生活委員会との連携を通じて、生徒が積極的に校内の環境美化に携われる行動意欲の向上を図る。	4 80%以上の生徒に、校内の環境美化に関する意識・行動の向上が見られた。	4	○校内美化に関するアンケートでは、生徒の肯定的な評価は90%以上、保護者の肯定的な評価は85%であり、掃除への取組意識や教室内の美化意識は比較的高い。	環境美化は生徒の落ち着いた学校生活や学力向上を促す。意識向上と定着への指導の充実を今後ともお願いしたい。	A	
			3 半数以上の生徒に校内の環境美化に関する意識・行動の向上が見られた。					
			2 校内の環境美化に関する意識・行動の向上が見られた生徒は半数以下であった。					
			1 生徒の校内の環境美化に関する意識・行動の向上が十分に図れなかった。					

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
保健体育課	心の健康に関する意識の醸成	保健便り、委員会活動、掲示物等を通して心の健康について情報発信すると共に、講演会を通して生徒に自己肯定感、自己有用感について考える機会を設定する。	4 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が80%以上であった。	4	○学校保健安全委員会主催講演会の事後アンケートでは生徒から90%以上の肯定的な評価が得られ、感想からも自己肯定感や自己有用感について考えることができた生徒が多く見られた。 ○心の健康について、「ほけんだより」に記事を掲載したり、生徒健康委員会の活動で掲示物を作成したりすることができた。引き続き、本校の健康課題を的確に把握し、課題解決に向けて取り組みたい。	心の健康の維持は、卒業後も重要な事柄である。自分自身で心の健康を維持するための方法を身に付けるための啓発活動の充実を、次年度も引き続き図っていただきたい。	A
			3 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が60%以上であった。				
			2 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が40%以上であった。				
			1 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が40%未満であった。				
寮務課	リトル・ティーチャー制による寮生活の充実	寮におけるリトル・ティーチャー制により、挨拶や時間を守ることなど集団生活に必要な規律を身に付けさせ、円滑な寮生活を送ることができるようになる。	4 寮におけるリトル・ティーチャー制を進展させ、寮生が十分に充実した集団生活を送ることができた。	4	○学校評価アンケートで、幅広い年齢層の生徒がいることは自分にとってプラスだと思っている生徒が93%、寮生活などで、上級生から仕事を親切に教えてもらっている、あるいは下級生に仕事を親切に教えていると思っている生徒が98%であった。寮生活全般で上級生が下級生をリードして自治的な活動を行っている。	リトル・ティーチャー制の長所は、下級生は上級生から影響を受け、上級生は下級生に教えることで成長する点にある。上級生と下級生の良好な人間関係や規律を保ちながら、円滑な寮生活が送れる環境づくりを引き続きお願いしたい。	A
			3 寮におけるリトル・ティーチャー制を進展させ、寮生がおおむね充実した集団生活を送ることができた。				
			2 寮におけるリトル・ティーチャー制を進展させたが、寮生が充実した集団生活を送るまでには至らなかった。				
			1 寮におけるリトル・ティーチャー制を進展させることができず、寮生が充実した集団生活を送ることもできなかった。				
	学習環境の一層の充実と生徒の学力向上	学習時間の有効な活用と個々の生徒への相談活動の充実を通して学力を向上させる。	4 学習時間に集中して学習できる生徒が80%以上であり、学習時間以外でも時間を見つけて、学習する姿が見られた。	2	○学校評価アンケートで毎日十分な学習をしていると回答した生徒が67%であった。また、後期生が学習時間以外にもロビーや自習室で学習している姿をよく見かけた。	上級生による下級生用の補講のようなものを定期的にも実施してはどうか。限られた時間の中で個々が集中して学習に臨む指導を引き続きお願いしたい。	A
			3 学習時間に集中して学習できる生徒が80パーセント以上であった。				
			2 学習時間に集中して学習できる生徒が70%以上であった。				
			1 学習時間に集中して学習できる生徒が70%に満たなかった。				
中等教育学校推進課	GIGAスクールを踏まえた、校内研修・研究授業の充実	互見授業と教科領域別研究授業を実施することを通して、GIGAスクール環境を生かした研究環境づくりを推進する。	4 90%以上の教員が互見授業を実施した。	2	○互見授業は、7割以上の教員が実施できた。しかし、4月当初の計画から、GIGAスクール環境づくりのスケジュールが大幅に遅れたことが悪影響を及ぼした。個人端末の到着遅れや設定の不備、校内LANや教材提示装置の設置工事の遅れ等が重なり、GIGAスクール環境への習熟が優先され、これらを活用した互見授業の充実ができなかった。	生徒の学力向上に資する先生方の授業力向上のために、GIGAスクール環境を生かして、今後とも全教員が積極的に互見授業を実践してもらいたい。ICTの教育への利用については、教員の負担が増えないような工夫が必要である。また、生徒にマナーやルールを指導する力も教員に求められる。	B
			3 70%以上の教員が互見授業を実施した。				
			2 50%以上の教員が互見授業を実施した。				
			1 50%未満の教員が互見授業を実施した。				
	国際交流活動や留学・海外研修によるグローバル人材の育成	総合的な学習の時間（東アジア文化入門）、海外派遣事業、諸外国からの学校訪問受入等を積極的に行う中で、国際交流のリーダーとなる生徒を育てる。	4 学校に関するアンケート結果と国際交流に関する調査結果の90%以上が肯定的であった。	3	○学校に関するアンケート結果における、保護者の肯定的意見が89パーセントだった。 ○新型コロナウイルスの蔓延環境の中でも、個人端末を活用した国際交流活動を増加する。	コロナ禍で、例年のような国際交流活動が実施できなかったのは残念であった。例えば地元企業の活動を知ることでもグローバルな視点を養うことは可能であろう。個人端末を活用した新しい国際交流活動に積極的に取り組んでほしい。	A
			3 学校に関するアンケート結果と国際交流に関する調査結果の70%以上が肯定的であった。				
			2 学校に関するアンケート結果と国際交流に関する調査結果の50%以上が肯定的であった。				
			1 学校に関するアンケート結果と国際交流に関する調査結果の50%未満が肯定的であった。				
	NIEの組織的な推進	NIE活動を学習活動や生徒会活動に位置づけ、学校全体で新聞活用を行える環境をつくる。	4 90%以上の教員が新聞を活用した指導を実施した。	3	○6回生を中心として特に進路指導において新聞の活用が広まった。 ○各教科においても新聞活用の授業が広がりをみせている。 ○教師も生徒も、新聞がより利用しやすいような環境づくりに留意する。	新聞を通じてより高度な単語にふれ、情報を入手し、皆で議論しながら自身の考えを形成していくプロセスを大切にしたい。また文章力を養う効果も期待できるこの活動について引き続き組織的な対応をお願いしたい。	B
			3 70%以上の教員が新聞を活用した指導を実施した。				
			2 50%以上の教員が新聞を活用した指導を実施した。				
			1 50%未満の教員が新聞を活用した指導を実施した。				
大学・地域連携課	大学等ゼミ訪問の円滑な運営	校内外担当者と連携し、円滑に運営する。	4 円滑な運営がなされた。	4	○前年度の問題点を受け、今年度はグループ単位でのゼミ訪問を実施した。コロナ禍により直接のゼミ訪問が叶わなかった生徒も、リモートやメールでの指導を受けることにより、一定の成果は上げることが出来た。課題としては実施時期が訪問先ごとにばらついたことである。次年度は概ね秋までの実施を目標としたい。	大学等ゼミ訪問について、リモートやメールを活用した指導を取り入れたことは新たなチャンスにつながる。大学側と意見交換し、知的財産の視点も持ちながら進めていくべきである。生徒に不公平感が残らないような更なる工夫や改善を検討していただきたい。評価基準をもう少し明確にすると良い。	B
			3 円滑な運営がおおむねなされた。				
			2 円滑な運営がほとんどなされなかった。				
			1 円滑な運営がなされなかった。				

分掌	重点目標		評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価		
1 年生	学習指導	授業規律の定着と基礎学力の育成	授業前の2分前着席・黙想・朝読書（朝学）の習慣を確実に身に付けさせることで、望ましい学習規律の定着を図る。	4 3 2 1	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、すべてが充実し、学習環境がしっかりした。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、2つが充実した。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、1つが充実した。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）において、どれも十分でなかった。	4	○70%以上の生徒が、望ましい学習規律が身につけていると回答している。時間を守り、次の授業の準備をする習慣が学習への集中力を維持することにつながっていると感じる。朝読書や朝学も自分に必要な学習を意識して毎朝の10分間を過ごしている。	黙想は意識を学びに切り替える効果があり、生徒は落ち着いて学習に取り組んでいると感じられる。	A
	生活指導	一人ひとりが活躍できる場の設定による豊かな人間性と望ましい集団の育成	学年集会、行事、委員会活動等を生徒に企画・運営させることにより、自己有用感を育て、望ましい集団の育成を図る。	4 3 2 1	生徒主体の委員会・集会活動を学期に3回以上実施した。 生徒主体の委員会・集会活動を学期に2回程度実施した。 生徒主体による学年活動・委員会活動を学期に1回程度実施した。 生徒主体による学年活動・委員会活動ができなかった。	2	○三密を避けるという観点から、集会活動を度々設定することができなかった。しかし、日常の生徒会の委員会活動や給食当番の活動などでは、主体的に活動していた。生徒中心に企画した学年レクリエーションとソーラン節発表会では、生徒のアイデアの活かされた充実した活動になった。	生徒の主体的な活動は、自ら学び、理解することを促すことにもなると期待される。1年生の人間関係づくりには、今後も引き続き特に力を入れてもらいたい。	A
2 年生	学習指導	主体的な学習習慣の確立と確かな学力の定着	授業前に2分前着席・黙想を確実にし、朝読書・朝学も充実し、学校での落ち着いた学習環境の充実を図る。	4 3 2 1	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、すべてが充実し、学習環境がしっかりした。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、2つが充実した。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）のうち、1つが充実した。 2分前着席・黙想・朝読書（朝学）において、どれも十分でなかった。	4	○授業前の2分前着席・黙想については、アンケートからも定着してきており、落ち着いて授業に臨んでいる。朝読書については、洋書も取り入れ実施した。後半、朝読書から朝学への移行は、スムーズになされた。前日に予習をし、「新研究ノート」をチューターに提出し、その内容を朝学プリントですという一連の流れはできている。総じて学習環境は整い、学校生活は落ち着いていた。	読書は低学年から身に付けたい習慣であり、自己学習力の伸長が図られ、生徒は落ち着いて学習に取り組んでいると感じられる。	A
	生活指導	一人ひとりが活躍できる場の設定による豊かな人間性と望ましい集団の育成	学年集会、行事、委員会活動等を生徒に企画・運営させることにより、自己有用感を育て、望ましい集団の育成を図る。	4 3 2 1	生徒の80%以上が校内行事・活動・プレゼンテーションなどを通して自己有用感を感じている。 生徒の50%以上が校内行事・活動・プレゼンテーションなどを通して自己有用感を感じている。 生徒の30%以上が校内行事・活動・プレゼンテーションなどを通して自己有用感を感じている。 生徒のほとんどが校内行事・活動・プレゼンテーションなどで自己有用感を感じることができなかった。	4	○新型コロナウイルス感染症予防対策のため、様々な活動が中止、変更を余儀なくされた。しかし、「私の意見発表」の学年発表会、職業調べでの新聞づくり、立志の誓いで志を書きあらわすことなどをとおして、自分のあり方や生き方を考えることができ、限られた状況の中で多くの生徒が達成感を感じることができた。	生徒の主体的な活動は、自ら学び、理解することを促すことにもなると期待される。コロナ禍にあり、十分な活動ができず、限られた活動の中でも生徒の達成感が得られたことはすばらしいことである。	A
3 年生	学習指導	自己学習能力の伸長と学習習慣の定着	家庭での予習、学校での朝学、教科指導、復習のサイクルの定着を通して、基本的な学習習慣の確立を図る。	4 3 2 1	学習サイクルが身に付いたと感じた生徒が80%以上であった。 学習サイクルが身に付いたと感じた生徒が50%以上であった。 学習サイクルが身に付いたと感じた生徒が30%以上であった。 学習サイクルが身に付いたと感じた生徒がほとんどいない。	4	○「はい」と「どちらかといえばはい」と回答した生徒が80%であった。2年生10月より「新研究」をスタートしたが、前日に予習をし、新研究ノートをチューターに提出し、その学習内容の定着度を朝学プリントで確認するという流れが定着した。このような学習の流れが、日々の授業にも良い影響を与えたと考える。	「新研究」を通して、学習習慣の定着の努力がされている。基礎学力の向上につながるように、今後とも一層の取組を期待する。	A
	生活指導	豊かな人間性を育み、主体的に動くことのできる態度の育成	学年集会、行事、委員会活動等を生徒に企画・運営させることにより、自己有用感を育て、望ましい集団の育成を図る。	4 3 2 1	生徒の80%以上が自己有用感を感じた。 生徒の50%以上が自己有用感を感じた。 生徒の30%以上が自己有用感を感じた。 生徒のほとんどが自己有用感を感じることができなかった。	3	○新型コロナウイルス感染拡大防止という観点から、学年集会がなかなか実施できなかった。しかし、委員会活動や係活動は、生徒主体に進めることできた。また、教務課や進路指導課との連携をとり、自分の進路について深く考えさせることができた。このことも自己有用感を育てることにつながった。	生徒の主体的な活動は、自ら学び、理解することを促すことにもなると期待される。コロナ禍にあり、十分な活動ができず、限られた活動の中でも生徒の主体性や自己有用感を育てることができたのは良かった。	A
4 年生	学習指導	学習習慣の定着	日々の課題や週末課題、定期考査・模試等を通して、計画的・継続的に学習する習慣を身に付ける。	4 3 2 1	平日2時間、休日4時間の学習習慣が身につけている生徒が80%以上であった。 平日2時間、休日4時間の学習習慣が身につけている生徒が70%以上であった。 平日2時間、休日4時間の学習習慣が身につけている生徒が60%以上であった。 平日2時間、休日4時間の学習習慣が身につけている生徒が60%未満であった。	1	○「はい」と回答した生徒は僅か8%、「どちらかといえばはい」と答えた生徒が34%と、42%の生徒しかこの目標を達成できていなかった。学習時間調査の休日の平均値(1/6~1/20までの記録・考査期間含めず)は、平日145分、休日182分であった。この数値から鑑みると、目標であった平日2時間は概ね達成できているようだが、休日の使い方が課題である。(ちなみにスマホ等の端末の平均使用時間：平日：104分、休日147分)	目標を高め設定しているため低評価となっている。数値目標を考え直すか、違う評価の仕方を検討しても良いと考える。また、学年間で視点のばらつきを解消すべきである。	B
	生活指導	基本的な生活習慣の確立	提出物の提出期限を守る。	4 3 2 1	提出期限の順守が身に付いている生徒の割合が95%以上であった。 提出期限の順守が身に付いている生徒の割合が90%以上であった。 提出期限の順守が身に付いている生徒の割合が85%以上であった。 提出期限の順守が身に付いている生徒の割合が80%以上であった。	3	○「はい」と回答した生徒は56%、「どちらかといえばはい」と答えた生徒が34%と、90%の生徒が提出期限の順守ができていると評価している。ただし残りの10%の生徒については、今後も継続して指導をしていく必要がある。	提出物の提出期限を守ることは、社会生活の中で最も基本的なことである。内容の充実も含めてしっかりと指導をお願いしたい。	A
5 年生	学習指導	自己進路の明確化	個人面談や学年行事の充実	4 3 2 1	チューターによる個人面談を年5回以上行う。 チューターによる個人面談を年3回以上行う。 チューターによる個人面談を年1回以上行う。 チューターによる個人面談は年1回未満である。	3	○将来のヴィジョンをほとんどの生徒は持っている。また、学年としてはとにかく高みを狙うように指導してきている。共通テスト模試を終え、将来に現実味を帯びてくる中、若干不安を抱く生徒も出て来てはいるが、個人的な面談等を通して新たな提案等による様々なアプローチを行うことで対応している。	チューターによる個人面談を実施し、生徒指導・進路指導をきめ細かく行ったことがうかがえる。	A
	生活指導	PDCAサイクルの有機実践による生活の質の向上	スケジュール帳活用による、計画性の確立と実践力構築へのアプローチを行う	4 3 2 1	80%以上の生徒がPDCAサイクルを意識した生活ができるようになった。 70%以上の生徒がPDCAサイクルを意識した生活ができるようになった。 60%以上の生徒がPDCAサイクルを意識した生活ができるようになった。 50%以上の生徒がPDCAサイクルを意識した生活ができるようになった。	2	○スケジュール帳を活用することで学校生活全般の質の向上が、活用する以前と比較するとみられたアンケートで回答した生徒は62%であった。考査前には必ず全員提出させて、記入内容について指導してきたが、マストツールとして有機的に活用しPDCAサイクルを意識した生活が出来るよう、今後も繰り返し粘り強く指導していきたい。	教師の評価の前に、学生同士でPDCAサイクルを確認し合い、うまくいっている生徒とそうでない生徒が意見を交換し合うことも重要である。生徒同士が協力しながら精進し合うことで、教員の負担軽減にもつながる。	B
6 年生	学習指導	確かな学力（思考力・判断力・表現力等）と豊かな人間力の育成による希望進路の実現	受験に向けた学習（授業・課外・朝学等）の質・量をともに高める。	4 3 2 1	確かな学力と豊かな人間力を十分に育み、90%以上の生徒が希望進路を実現した。 確かな学力と豊かな人間力を育み、80%以上の生徒が希望進路を実現した。 確かな学力と豊かな人間力のある程度育み、70%以上の生徒が希望進路を実現した。 確かな学力と豊かな人間力を育むことができず、70%未満の生徒しか希望進路を実現できなかった。	3	○98%の生徒が「日々の学習を通じて学力を伸ばし、人間力を高めることができた」と学校評価アンケートで回答しているが、教員の手ごたえとして、「充分に」とは言い難い。 ○最終結果は出ていないが、ほとんどの生徒が自分の決めた進路に進むことができた。	生徒の希望進路の決定率の高さは、教員の組織的・計画的な取組のおかげだと考える。	A
	生活指導	最上級生としての規範意識の醸成およびリーダーシップの発揮	最上級生としてふさわしい言動を意識し、部活動や学校行事の機会においてリーダーシップを発揮する。	4 3 2 1	最上級生として高い規範意識を醸成し、十分にリーダーシップを発揮した。 最上級生として規範意識を醸成し、リーダーシップを発揮した。 最上級生としての規範意識を十分に醸成できず、リーダーシップもあまり発揮できなかった。 最上級生としての規範意識を醸成できず、リーダーシップも発揮できなかった。	3	○82%の生徒が「最上級生としてふさわしい言動を意識し、リーダーシップを発揮することができた」と学校評価アンケートで回答しているが、うち47%が「どちらかといえばはい」であり、教員の手ごたえとしても「充分に」とは言い難い。	コロナ禍にあり最上級生としての活躍の場が狭められたのは残念であった。多くの生徒に最上級生としての意識が生まれているということは、6年間の学校生活の成果であり評価できる。	A

5 学校評価総括(取組の成果と課題)

(1) 確かな学力の保証

- 各学年・教科で学力面のデータ分析を行い、全教員で共通理解を図り、授業改善などに取り組んだ結果、今年度も如実な学力向上がみられた。今後とも一層学力向上に取り組むたい。
- 新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践する。
 - ・次期学習指導要領に対応した新教育課程の研究に全教科で取り組み、編成を終えた。さらに、新大学入試制度についても研究を深め、より効果的な教育課程の実施に努めたい。
- 生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。
 - ・授業以外の学習時間については、生徒・保護者の約半数、教員の5割が不足していると感じている。昨年に比べその割合は下がったが、引き続き本校の大きな課題である。
- 世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実を図る。
 - ・例年開催している本校や、民間業者による英語学習セミナーは、新型コロナウイルスの感染拡大により実施できなかった。しかし、既に来年度へ向けて実施の方向で動いている。
 - ・ALTと理数教科教員でイマージョン教育を実施し、本校全体で研修に取り組んだ。今後も研修を進めていきたい。
 - ・平成29年度入学生から、4回生時での14日間カナダ語学研修に変更し、より効果的な英語教育を目指していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、その実施ができなかった。代替措置を検討中である。
 - ・小中高連携英語教育推進校として、小中の英語教育の現状を認識し、スムーズな繋がりを意識した本校英語教育の実践を図った。
- ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。
 - ・1人1台端末(指導者用・学習者用)が整備され、授業や家庭学習での積極的な活用を図っている。
 - ・ICT研究指定校として、ICT活用の基本的部分に関する教員研修を複数回実施した。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

- 一人ひとりに対応した適切な指導により、就職希望者7名は公務員6名を含め希望実現、進学希望者102名は91人が希望を実現した。(3月15日現在)
- 生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学等ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。
 - ・例年実施している、1回生で下関市立大学訪問、2回生で山口東京理科大学訪問、3回生で山口大学本学訪問、4回生で志望大学オープンキャンパス参加は、新型コロナウイルスの感染拡大により、未実施に終わった。3～5回生での県内国公立大学講師による「大学出前講義」は実施することができ、生徒の進路意識の向上を図ることができた。
- 本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。
 - ・小論文対策・面接対策に組織的に取り組み、成果をあげた。
 - ・各教科で本年度から始まった大学入学共通テストを分析し、その傾向・対策についての意識を深めた。

(3) 豊かな心をもち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

- 各分掌・学年で人間教育に取り組み、着実に成果をあげている。
- 生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。
 - ・本校のリトル・ティーチャー制の実施については、生徒・教職員ともに9割が肯定的に捉えている。各種行事において、生徒の企画・運営・指導力を発揮させ、生徒の自主活動を推進させることができた。
 - ・寮生もリトル・ティーチャー制の実施については9割が肯定的であり、寮生活においても自立心が育ち、円滑な生活を送ることができた。
- 人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。
 - ・新型コロナウイルスの感染拡大により、他国からの本校訪問は無かったが、学校行事や学年行事で、生徒が主体的に活動する場を多く設定し、望ましい集団の育成に努めた。
- 留学制度について啓発活動の充実を図り、生徒の参加を促進する。
 - ・新型コロナウイルスの感染拡大により、海外留学制度の活動が止まっていたが、来年度の「トビタテ！留学JAPAN」への参加希望者はすでに一次審査を通過するなど、留学を希望する生徒が増加した。

(4) 組織としての課題解決力の確立

- 全教員がリスクマネジメント意識を持てるように今後とも計画的に研修に取り組んでいく。
- 教科研修会と互見授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。
 - ・各教科で定期的・計画的に研修会を開催し、教科指導力向上に励んだ。
 - ・イマージョン教育活動を実施し、教員全体で研修に取り組んだ。
- 生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。
 - ・計画的に研修を実施した。引き続き教員の指導力の一層の向上を図っていく。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

- 志願倍率が1.7倍と昨年から若干下がったが、引き続き強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。
- 本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実を図る。
 - ・「飛翔プロジェクト」を推進し、地域・保護者への広報活動の充実することにより、本校の教育活動の理解が深まった。
- 小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実を図る。
 - ・新型コロナウイルスの感染拡大により、本校は小学生対象の各種行事を実施できなかったが、市内小学校への広報活動により、強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。

6 次年度への改善策

「次年度も、飛翔プロジェクトを円滑に運営することで、地域や大学との連携を一層深めながら「未来社会を生き抜く総合的な人間力」と「高い学力」を培い、世界に飛躍する人材の育成に向けて教育活動の充実に努める。

(1) 確かな学力の保証

- 新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践を進める。
- 生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。
- 世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実に努める。
- ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

- 生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。
- 本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。

(3) 豊かな心を持ち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

- 生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。
- 人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。
- 留学制度について啓発活動の充実に努め、生徒の参加を促進する。

(4) 組織としての課題解決力の確立

- 教科研修会と互見授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。
- 生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。
- 新入学生の着実な学校生活への適応の為、教員全体で学習面・生活面におけるフォローを進める。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

- 本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実に努める。
- 小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実に努める。